

JOHN HAWKES

ジョン・ホークス作品集【4】

激突

飛田茂雄◆訳



TRAVEL

ジョン・ホークス作品集【4】

激突

飛田茂雄◆訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

彩流社

《訳者紹介》

飛田茂雄（とびた しげお）

1927年生まれ。

現在 中央大学総合政策学部教授。

著書 『探検する英和辞典』（草思社）

『私が愛する英語辞典たち』（南雲堂フェニックス）

訳書 ジョーゼフ・ヘラー『キャッチ=22』（早川書房）

カート・ヴォネガット『母なる夜』（早川書房）

カズオ・イシグロ『浮世の画家』（中央公論社）

トバイアス・ウルフ『バック・イン・ザ・ワールド』（中央公論社）

トバイアス・ウルフ『ボーイズ・ライフ』（中央公論社）

トバイアス・ウルフ『危機一髪』（彩流社）

ジョーゼフ・キャンベル『神話の力』（早川書房）

ジョーゼフ・キャンベル『時を超える神話』（角川書店）など。

ジョン・ホークス作品集 4

激突

1997年2月10日初版第1刷発行

著者 ジョン・ホークス

訳者 飛田茂雄

発行者 竹内淳夫

発行所 株式会社彩流社

東京都千代田区富士見 2-2-2 郵便番号102

電話03-3234-5931 ファクシミリ03-3234-5932

組版 有限会社ポイントナイン

印刷 株式会社平河工業社

製本 有限会社青木製本

ISBN 4-88202-433-0 落丁本・乱丁本はお取替いたします

いまわたしを強く促えている想念によれば、詩神ミューズはとりもなおさず近づきたい、あるいは姿の见えない死んだ女であり、詩的構造は——鋼鉄に囲まれたひとつの穴にすぎない大砲のように——自己が所有しないものだけを基盤となしうる。そして究極のところ、人は単に虚空を埋めるために、あるいは少なくとも、われわれ自身の最も透明な部分との関係において、この底知れぬ深淵が自己の内面で大きく口を開いている位置を確かめるために、ただそのためにのみ、書くことができる。

ミシェル・レリス『成人』

ある知人がいつも人間を三つのカテゴリーに分けていました。強いられてうそをつくくらいなら、最初からなにひとつ隠しだてしないほうがましという人々。なにひとつ隠しだてしないよりは、うそをついたほうがましという人々。そしてうそをつきたがり、隠しだてもしたがる人々。そのうちのどのカテゴリーがわたしにぴったりするか、判断はあなたにまかせましょう。

アルベール・カミュ『転落』

三人のソフイーのために

目次

激突

5

虚構の多層性について——ジョン・ホークスへの書簡

161

右の謝辞と覚え書

187

激突

だめだめ、アンリ。手をハンドルから離してくれ、たのむ。もう手遅れだ。なにしろ真っ暗な夜ふけ、田舎道を時速百四十九キロで走っているんだ、きみがハンドルを奪い取ろうとちょっともがくだけで、車はぼくの計画よりもっと早く、ハイウエー事故という単調な悲劇世界のなかに突入する。まちがいない。そして、信じられないだろうが、スピードはもっと増しているんだ。

ところでシャンタル、気を緩めてはいけない。パパの言いつけに従いなさい。座席に深く掛けて、ベルトを締め、泣くのはやめること。そして、シャンタル、ドライバーの肩のあたりを殴ったり、腕をゆすったりするのもやめてほしい。いい子だからシャンタル、アンリを見ならって落ち着きを

とりもどすのだ。

だが、見たまえ、この疾走ぶり！　そしてカーブ。なんと急で、なんと数の多いこと！　歓喜の幾何学模様！

少なくともきみたちは熟練ドライバーの手中にある。

やっとリラックスしはじめたようだな、きみ。^{シェラミ}震えを隠し、何秒かは口をつぐみ、大好きなシガレットを吸おうとしている。そして、貴重な時間をこうやって適切に過ごしたあと、日ごろと同じ冷静さをすっかり回復してから、ぼくを思いとどまらせよう、説得して正気に（ということばを使いたいんだろう）たち帰らせよう、ぼくの思いやりや良識に訴えよう、と試みるだろう。けっこう耳を傾けよう。この一時間はきみのものだ。だがもちろん、車のライターは使ってもかまわないよ。ただ、ゆっくりと手を伸ばすこと。さっきの警告を忘れないで。ぼくが好人物だからって、甘く見てはいけない。なにしろぼくの真剣さは燃え上がる炎も同然だから。

それからシャンタル、そのすすり泣きはやめなさい。二度と同じ注意はしないつもりだ。パパが

おまえを愛していることくらい、わからないのか。若い娘はいくらでもいるが、最後の何十分を、愛する男と愛情ゆたかなパパの両方といっしょに過ごす機会にありつける者は多くない。暗黒の夜、スピードをあげる車、この三人、飛びすぎる路傍の木の根に一瞬舞い散る時ならぬ粉雪。これはあたたかくて心地のよい道中だろう、シャンタル。恐れてはいけない。

そして、ぼくらがいつもこの子を「ヘボルノ小僧」と呼んでいたことを思うと。そう、実のわが子シャンタルを。シャンタルはひとりで歩けるようになるが早いのか、いつでも両親のエロティックな生活のなかへ転げこむようになった。いや、彼女の若い両親の幻想的生活のなかへ、と言うべきか。とにかく自分たちの赤ん坊を、女の子だというのに「ヘボルノ小僧」と呼びはじめたのはオノリーヌのほうだ。にこにこ笑いながら。あの無邪気な微笑はいつでも、きみの愛人、ぼくの妻、シャンタルのまだ若くて愛情ゆたかな母親の、卵形で肉感的な顔にいかにも似つかわしい。ああ、それにシャンタルの同級生がいた。いたずらっばいおてんばで、シャンタルにくれた視力検査表にはだんだん小さくなる文字でこう書いてあった——セックスがすぎるときんがんになります。

だが、知っているかね、ぼくはまだ一度もめがねをかけたことがないし、いまでも、視力矯正の手段をなにひとつ用いることなしに最も高速の車を運転してよいと認められているんだ。

シャンタルとオノリーヌ！　なんと好一对の名前だろう。そしてこの瞬間、その一方がぼくらのすぐうしろで色蒼ざめ、ほおに涙の筋をつけ、祈る代わりにヒステリー寸前の状態に陥っており、もう一方はぼくらがいま近づきつつあるシャトーのなかで眠っているかと思うと。でも元気を出しなさい、シャンタル。このしらせを受け取るときのオノリーヌを慰める手だては、なにひとつないだろうが。

殺人行為だって、アンリ？　いやはや、そこがきみたち詩人の困ったところだ。ペシミズムに陥ったきみたちは、書かれた言葉で達成された明瞭な表現を猿まねしているに過ぎないし、詩を朗唱できるといっても、役者が台詞セリフをしゃべるのと同じこと、おまけにきみらは、ぼくらのような特権薄き者どもの手や足や、腰や口を締めつけるあのあらゆる行動規範からまったく解放されていると思ひこんでいる。それでいて、最後のどたん場になると、オオカミが来たじゃないが、道徳だ、

道徳だとわめきたてる。そこできみは、殺人を計画したといってぼくを非難するわけだ。しかし、そのことばを使うことそれ自体によって、きみはどうとう、詩人のなかでも最も陳腐で、最も浅薄な者に過ぎないことを暴露したわけだ。放蕩者でもなく、洞察力に富む見者、つまりは苦悩の人でもなく、陳腐な道学者に過ぎないことを。〈殺人〉というそのおぞましいことばの含みを考えたまえ。感情的な抑制の喪失、憎悪、遺恨、利己主義、割れたガラス、血、のどから絞り出される絶叫、とりかえしのつかない行為を惹き起こす震えを帯びた盲目性、絶望的な殴打。殺人はあらゆる行動のうちでも最も限定されたものではないか。

だが、この状況はなんと異なったものだろう。きみは時間のなかで宙吊りにされ、指のあいだに火のついたたばこをはさみ、きみ自身の汗と計器板ダッシュボードのやわらかな光のなかに浸っている。これらすべてのなかに明晰さはあるけれども道徳性は存在しない。倫理さえない。きみとシャンタルとこのぼくは、世間の連中が、始末に負えぬ大混乱を招きそうな道路標識、迂回路、往來止めバグケードを無数に林立させることによってぼくらの目から隠そうとしているあの道路を、ただ純粹さと究極性のうちに疾走しているだけ。その選択がきみではなくぼくのものだからといって、ぼくが運転者で、きみが同乗者だからといって、なんの問題があらう。わからないのか、きみの道徳性などシャンタルの

すすり泣きも同然だということ、そして、いまここでぼくらは、混沌よりもむしろ選択の問題を扱っているということが。

ぼくは詩人ではない。殺人者でもない。ところでシャンタルは、へにんじん女王の称号を獲得したときのことをきみに話したかね。まだだって？　だがたぶん、ぼくの娘に対するきみの性的知識が、けっきょくのところきみを近視眼にしたのだろう。

いや、あざ笑っているわけじゃない。ぼくはきみが会おうどんな人間よりも思いやりに富んでいるんだから。

速度を落とさせて？　しかし事の成り行きは、倒錯した電気仕掛けで動かされているどこかの交通警官なんぞによって規制されるようなものじゃない。ぼくらは星や、彗星や、冷たい夜の闇のなかでほとんど姿も見せずに暴進している機関車や、がらあきで走っている乗合自動車の車掌と議論しているわけではない。ぼくは子供じゃない。そして、きみがただの透明性や情念に駆られて行動することは、よもやあるまいと信じている。車のスピードは——たまたま、ぼくの運転技術、この

すいた道路、夜のこの時間、車のエンジンの出力、そして、木々のあいだや平坦な野原など、行く手にひろがる四季の壮大さを含む——無数の最大マキシマムの花壇に咲くひとつの最大マキシマムだ。きみとぼくは太陽系のことを習ったばかりの生徒のように（といっても、ぼくは自己卑下したり、単純思考に陥ったりするつもりはないが）、人生のあらゆる要素がたがいに関手を強く要求しあっていること、つまり、それぞれが時々刻々おたがいを強制的に引き寄せて、崇高かつ可能な唯一のものである、あの完璧な形態を構成していることを知っている。ぼくはある特定の距離を意識している。その黄色いヘッドライトはぼくの目の光であり、ぼくの心は曲がりくねったこの道に関する自分の記憶のなかに封じこめられている。まるでガラスに封じこめられた握りこぶしのように。

ぼくがいまとまったく同じ道を、ひとりで、可能なかぎり最大のスピードを出して何度くりかえし走ったか、きみは知るよしもない。あの無数の午後のことをきみが知ることはできない。それぞれの夕方近くが、この静かな自動車、車の下で仰向けになって作業する整備士、クロミウム製の計器群、かすかに 그리스 とオイルの匂いだけを放っている沈黙、そして、ほとんどからっぽな航空機格納庫の内部を思わせる場所の片隅に座った、辛抱づよい観察者たるぼく自身を含んでいたのだが。ほら、ここにきみのスピードがある。と言っても、信じられないかな。

巨大な修理工場のコンクリートの床に死んだように横たわった白衣の男の手による整備と、このハンドルの厚いくろぐろとした革カバーに対するぼく自身の両手のあたたかくて生気に富んだ把握とのあいだには——あの時からいまこの時まで、ひとつの手からふたつの手まで、車体の下でなされた細部に至る整備作業から、疾走する車を路上に保つ頭脳の生命までのあいだには——なにもない、まったくなにもない。

この車で最後にあの修理工場へ行ったとき、ぼくはその整備士と握手した。傾斜路であるじを待っている自動車は新品のようにキラキラ光っていた。いまわれわれは銃弾形の時計のなかにいるかのように、あたかも強力なスプリングや輝く宝石の群れによって固定されたかのように、座って旅をしている。そして燃料はタンクに満載、タイヤはまだ一カ月も使用していないくらい。

速度を落とせなんて言わないでくれ。それは不可能だ。

だが、ぼくがシャンタルの少女時代、ぼくの自動車愛好癖、ぼくらが共有している親密さ、空間の要塞を貫く車の急速な進行などについて漫然としゃべっているうちに、きみはもう襟もとを緩め